

牛痘種痘法奨励の版画について

添川正夫

わが国では、天然痘を予防する方法として寛政元年（一七八九）以来早苗法と称する人痘痲粉末を鼻から吸入させる、甚だ危険な人痘種痘法が主として行われていた。

幸い、活性のある牛痘苗が嘉永二年（一八四九）六月オランダ船によって長崎にもたらされ、この牛痘株が当時の進歩的医師であった蘭方医達の手により日本各地に伝わり、牛痘種痘法が次第に普及して行くのであるが、その道は険しく、決して平坦なものでなかった。

オランダ医学が次第に盛んになって行くのをおそれた漢方医は幕府に蘭方弾圧を工作し、幕府は嘉永二年三月に蘭方禁止令を出していたし、一方では痘科の専門医として瑞仙以来有名であった池田家の当主霧溪などが人痘種痘法で味わった苦い経験から、種痘法そのものに反対していたのである。

また、それまで人痘種痘法を業としていた人達の中には生業を守る立場から牛痘種痘法を攻撃し、中傷する者もあった。早苗法では身体に傷をつけること無しに行えるのに、牛痘種痘法では父母より享けた身体髪膚に傷をつけるとか、早苗法の場合には痘瘡患者の痘痲を以て材料とするので種痘を受けた者から種を取ることをしないのに、牛痘種痘法の場合には種痘を受けた者から採苗するとか、攻撃の材料はいくらでもあった。

一般大衆の中にも、牛痘種痘法は人由来の人痘種痘法と異なり、けだものである牛の病的材料に由来すると聞いて牛痘

種痘を受けると声が牛のようになるとか、頭に角が生えるとか信じ込む者がいた。

大野松齋が江戸浅草で牛痘種痘を始めた頃、木下川きねがわというところに二郎兵衛なる者が「ふきこみ法」(旱苗法)をしていて、多くの者がそちらにゆき、松齋の方にはなかなか種痘を受けに来る者がなかったばかりか、松齋はキリシタンパテルンの法を使うといつて命をねらわれ船内にかくれたこともあったという。(一)

このようなきびしい状態の中であつて、当時の種痘法は未種痘児の腕から腕に、およそ一週間の間隔で牛痘苗を植えていくのであつたから、未種痘児を確保できなければたちまち絶苗のおそれがあり、中でも、酷寒、酷暑の季節における蘭方医達の辛苦はまことに筆舌に尽くし難いものであつた。

このようなわが国における牛痘種痘の揺籃期に江戸深川で小兒科を開業し、牛痘種法の普及に苦心していた桑田立齋は、大衆が錦絵を好むところから牛痘種痘法啓蒙の錦絵を作ることを思いつき、牛痘児の絵を作り多数頒布した。

この絵の図柄が上品で、かつ説得力に富むところから他の医師達もこれにならい、かくて牛痘児の図は大衆に対する牛痘種痘法普及の手引きをなしたのである。

牛痘種痘法奨励の版画については、これまで一、二紹介されたこともあるが、図柄のみならず絵解き文を解説、比較して検討したものは見当らない。

筆者は、七種の牛痘種痘法奨励の版画について、図柄のみならず、絵解き文を厳密に比較し、考察を行ったので報告したい。

一、桑田立齋の版画(図一)

図一は、「伊東玄朴伝」に掲載されているもので、『立齋世人種痘の何たるを知らず、是を怖るるの弊あるを憂い種痘の絵を作り是を坊間兒女に与う、他の医師亦是に倣い茲に種痘術普及の端緒を為したり、巻頭挿む処牛痘児の図蓋し立齋



図1 桑田立斎の版画

の作る処なり』と紹介されている。(二)

絵解き文の中で、わが国に牛痘苗が到来したのを去年の冬と述べていること、その他関係記録(三)、(四)から、この図は嘉永三年の正月には作られていたと見られる。立斎はこれを数千枚作ったという。(五)

立斎が伊東玄朴から牛痘苗の分与を受けたのは嘉永二年十一月十八日であるから、絵解き文は立斎自身の牛痘種痘についての経験のまだそれほど多くない時に、おそらくは師事した玄朴の所説に従って記したものである。

この版画の現物は、桑田文庫(大阪大学所蔵)の中にもなく、大きさ、彩色などを確認することはできないが、これを模刻したといわれる後述図三のそれに近いものであろう。

解説

(改行、句読点は筆者による。なお原文中の振仮名は特に読み難いと判断した場合を除いて省略した。)

疱瘡の神とは誰か名付けん^{*1}

悪魔外道のた、りなすもの

富嘉川萬年橋

ほうさうをうゑはじめしハ、もろこし宗^{*2}の仁宗の時也。是は鼻に入る、法也^{*3}。其外うゑやう五通りあり。

牛痘法といふは、一ばんあたらしく、すくれてよろし。

^{*4}文化年中おらんだにてエトイエネルといふ人はしめて見ひらきたり。其始へ、牛をやしなふ家、必ずほうさうかるし。或牛の乳房に、ほうさう一二粒はつせしあり。其うミをとりて小児にうつしみるに、其うつせし手にのミ五六粒できて外へ出ることなし。不思議のことにおもひ其後又人のほうさうを其子にうつるといへどもはつすることなし。

是よりおらんだ中此法ばかりになり、夫より文政年中にへ、からへ此法渡り、もろこしにふるくある鼻に入る、法とうゑくらべ見るに、此法かくべつすぐれてよきこと医俗とも知るやうになり、其わけを書物にし、^{*5}唐より日本へも渡したり。当時は天竺其外世界中此法のみになり、外の法へすたりぬ。

^{*7}されどかとうとて疱瘡に似たるものあり。もし此かとふならばふた、び植べし。夫を知らずして二度発すると思ふあり。

世の中にはほど尊き法なし。夫ゆへ此種を四五年まへよりおらんだ人自まんにて、何よりのミやげとてたび／＼持渡れども気がぬけて用いた、ず、^{*9}やう／＼去冬、ある大侯のお骨折にておとりよせありて、姫君へうゑさせられしより世にひるまりしへ、人の親の幸ひ、子たるもの、仕合せこのうへやあるべき。

世の人よく迷をさりてはやく安堵の思ひをなすこそうへなき幸ひならんかし。

春亭画図

親の苦もぬけてたのしみ^{*10}どりの子

千代の命をむすぶたとさ

^{*11}桑齋接痘主人

図中、前の短冊には「実へ悪魔疱瘡神」、後のものには「生国阿蘭陀 牛痘児」とそれぞれ二行に書かれている。

注解

* 1 「疱瘡の神」

痘瘡が他の伝染病と異なり、序熱、発疹、水疱、膿疱、結痂、落痂と明瞭に病期を画して経過することから、民衆は、痘瘡を神の仕業と考え、この神を痘瘡神とてあがめ祭つたのである。痘瘡神信仰が痘瘡防遏上大きな障碍であることを痛感していた立齋は、種痘絵の冒頭で大きくこれを取り上げ迷信打破を訴えたのである。

* 2 「宗の仁宗の時」

本文では宗の仁宗の時（一〇二三）に人痘種痘法が始まったと記しているが、明の時代（一三六八）に始まったというのが通説である。

* 3 が「其外うゑやう五通りあり」

人痘種痘法には、早苗法のほかに接種法が五通りあるというのである。この中には立齋の著書「牛痘発蒙」に紹介されている種痘発泡法、種人痘刺法なども含まれているのである。立齋は、切皮して人痘膿を塗布し、繻帯し、あんぼうを施す方法を案出した養父玄真について人痘種痘法の豊富な経験をつんでいたのであった。

* 4 「文化年中おらんだにてエトイエンネルといふ人はしめて見ひらきたり」

E・ジェンナーが牛痘種痘法を発表したのは寛政十年（一七九八）であるから、文化年中（一八〇四—一八一八）というのは誤りである。

エトイエンネルのエトはEdwardのオランダ語読みエドワルトの略、イエンネルは Jenner のオランダ語読みである。ちなみに、ジェンナーを、有馬撰蔵はインネル、広瀬元恭はイ、ン子ル、緒方洪庵はイエン子ルなどと記している。（「牛痘新書」、「新訂牛痘奇法」、「扶氏經驗遺訓」参照。）

* 5 「文政年中にハ、からへ此法渡り」

スペイン政府が遠征隊を組織し、未痘の小児を船に乗せ船中で牛痘株を継種しつつルソンに、ついでアモイに伝えたのは文化元年の末か、文化二年の初めとされているので文政年中とあるのは誤りである。

* 6 「唐より日本へも渡したり」

英人ピアースンの著した牛痘種痘法に関する一書を英人スタアントンが漢訳した「泰西種痘奇法」が日本に渡来したことを指す。同書は伊藤圭介が訓点し天保十二年（一八四一）に刊行されている。

* 7 「かとうとて……」

立齋の牛痘児図、ならびにその流れを汲む版画のみならず、簡単な達生堂の牛痘種痘ピラ、藤直の種痘ピラにも「かとう」について述べられている。

これは、当時、牛痘種痘実施における最重要項目として真痘と仮痘との弁別をあげていたことによる。前述した如く、この絵解きは立齋の自己経験の乏しい頃のものであるが、その後立齋は一〇二八名に種痘した経験から「かとう」を、免疫のある者が種痘を受けて生ずる軽い発痘とみなしているようである。

* 8 「四五年まへよりおらん人自まんにて、何よりのミやげとてたび／＼持渡れども気がぬけて用いた、ず」

活性は失われていたものの、わが国には、文化年間（一八〇四—一八一七）にオランダ軍医某が、一八二三年にはシールポルトが、一八三九年にはリシュールが痘苗を持ってきているので、四、五年まえよりというのは正しくない。

* 9 「やう／＼去冬、ある大侯のお骨折にておとりよせありて、姫君へうゑさせられしより」

これは、榊林宗健が弘化四年（一八四七）に牛痘苗取寄方を佐賀藩に具申し、藩主鍋島直正がこれを認め、曲節はあったものの嘉永二年六月活性のある牛痘苗が長崎に到着し、同年十一月直正が参府の折に島田南嶺にこれを持参せしめ江戸邸（現在の日比谷公園のところ）においてまず玄朴がその娘に接種、その発痘材料を十一月十一日直正の長女貞姫の片腕に三顆宛二行両腕計十二顆接種し何れも善感したことをいうものである。

* 10 「みどり子の千代の命をむすぶ」

痘瘡の致命率は幼児において圧倒的に高く、子を持つ親にとり痘瘡は心配の種であった。立斎は、牛痘種痘により幼児の命が守られることを掲げて絵解きの結びとした。

* 11 「桑齋接痘主人」

桑齋は桑田立斎のこと。当時立斎は深川万年橋畔の海辺大工町（現在の深川清澄町）に小児科を開業して牛痘種痘の普及

嘉永三庚戌孟春



図 2 熊谷直恭の版画

につとめていた。

因みに、図に白牛を用いているのは、牛痘の獸性由来に対する大衆の偏見を和らげるために、わが国に古くからある白牛信仰（六）を立斎は利用したものであろう。

二、熊谷直恭の版画（図二）

図二は京都鳩居堂の熊谷直恭（蓮心）が施版したものである。縦二二六・八×横三九・六cm。

本図と図一とを対比してみると、冒頭の枠内の富嘉川万年橋の右肩に江戸と二字が書き加えられ、絵解き文で『鼻に入る法』、『ほうそう三粒はつせしあり』、『其うミをとつて』と僅かな相違を見るのみで、画家も同じく春亭としている。但し落款はない。

本図で最も注目すべき点は、図一と異なり牛痘児の腕に種痘痕を欠い

ていることである。

絵解き文から考え、本図は立齋の原図を模刻したものの、時代的に最も古いものであろう。

三、大阪除痘館の頒布した版画(図三)

図三、は嘉永三年大阪除痘館から頒布されたもので欄外に、この図の施版は江戸でなされたものであるが世人の為にと
考え今回翻刻してあまねく広めるものである旨のことわり書がある。こ
のことわり書は緒方洪庵によってなされたものと思われる。

画家は山樫である。

洪庵は嘉永二年十一月七日に大阪除痘館を開館したが、『…都下悪説
流布して牛痘ハ益無きのミならず却て児体に害ありといひ之を信するも
の一人も無之ニ至れり…』(『除痘館記録』)という有様、牛痘苗の継続、
牛痘種痘の普及に苦心惨憺していた。この版画は大阪においても牛痘種
痘法奨励に大いに役立ったに違いない。

掲載した版画の現物は(財団法人)博物館明治村所蔵のもので、縦二
五・八×横三七・五cm、多色刷である。かなり傷んでいる。

凸版印刷株式会社の調査によれば、原画は赤二版、藍二版、黄一版、
墨一版計六版を使った木版とのことである。

解説



図 3 大阪で除痘館から頒布された版画

此板行ハ江戸にて出来しを世の人のためにとて、この度雕刻して普くひろむるなり

富嘉川萬年橋

疱瘡乃神とハ誰の名付けけん

悪魔外道のた、りなすもの

ほうさうをうゑはしめしハ、も路こし宗の仁宗の時也。是ハ鼻に入る、法也。其他うゑやう五通りあり。

牛痘法といふハ、一ばんあたらしく、すくれてよろし。寛政年中おらんだにてイエン子ルといふ人はじめて見ひらきたり。其始ハ、牛の漣ちぢを絞る家、かならずほうさうすることなし。不思議のことにおもひて牛の乳房をぎんみせしに、ほうさう二三粒はつせしあり。其うみをとりて小児の手にうつし見るに、その手にのみ五六粒できて外へ出ることなし。其後又人のほうさうを其子にうつるといへともはつする事なし。

是よりおらんだ中、此法ばかりになりたり。其後、文化二年の頃唐土に此法わたり、もろこしにふるくある鼻に入る、法とうゑくらべ見るに格別すぐれてよきを醫俗ともに志るやうになり、其わけを書物にし、唐より日本へもわたしたり。當時ハ天竺其外世界中此法のみになり外の法ハすたりぬ。

されと假痘とて疱瘡ににたるもの、出る事あり。是はやくにた、ず。もし假痘ならばふた、びうゆべし。夫を志らずしてふた、びはつするとおもふあり。

世の中にはほど尊き法なし。夫ゆゑ此ほうさう種を四五十年まへよりおらんだ人自まんにて、何よりのミやげとてたひく持渡れとも気がぬけて用にた、ず。やうく去秋、ある大侯のお骨折にておとりよせありて世にひろまりしハ人の親の幸い、子たるもの、仕合せ此上や阿るべき。世の人よく迷ひを俟りてはやくあんどのおもひをなすこそうへなき幸ひな

らんかし。

山樗画〇

親の苦もぬけてたのしむみとり子の

千代の命をむすぶたうとさ

桑齋接痘主人

嘉永三戊年

大阪道修町御霊筋西へ入 除痘館

道修町四丁目 大和屋喜兵衛施印

注解

本版は江戸板の醵刻であるので構図、絵解き文共にそれに準拠している。しかし、最も注目すべきことは、筆者が立齋の絵解き文について指摘した牛痘種痘法発表の年代、牛痘が中国に渡来した年代、わが国に牛痘苗がもたらされた年代についての誤り(図一注解*4*5*8参照)が訂正されていることである。

しかし、本図においてもオランダでジェンナーが牛痘種痘法を発見したことになっている。

四、西村春雄の版画(図四)

図四は、能美季一著「家畜疾病予防学」に載っているもので、現物は某家の屏風に貼られていたと記されている(七)。

寸法、彩色不明。

この図の図柄、絵解き文は、立齋ならびにその流れをくむこれまでのものと著しく異なっており、牛痘児は地上で牛を牽いており、絵解き文では、造言にまようことなく、最良の方法であるところの牛痘種痘を愛児に施すべきことを簡潔に奨めている。



図 4 西村春雄の版画

解説

え戸東 はる雄筆

をさ那子か

うしに飛かれて

か路／＼登

阿そひを

する越

見るそ

た能しき

春雄

牛痘ハ無上良方那里。しかるにこ連を試ぬ医者又小智俗人の内にかれこれと悪評する人ま、阿里。そのいふ所を問極るに一ツとして確実なる事なし。必竟猜忌と偏固との二ツよりおこりて浮虚の造言するな里。

世人この造言にまよひて良方越うたがふ事なく、はやくこれ越うゑて、最愛の子の行末を安心あるべしと祢がふ一片の老婆心那李。

西村

注解

図四は、種々考証の結果、「牛痘解蔽」の著者西村春雄の作と決定したが、西村春雄はこのほかにも桑田立斎の著書「牛痘発蒙」の扉に同趣の和歌を詠んでいる。

図五（原図は朱刷り）がそれで、痘瘡鬼を踏み敷いている白牛の背に乗った菩薩が嬰兒に手を差しよべて救い上げようとする図に、樂府「西江月」で牛痘種痘法の良法であることを謳い、春雄は

雪霜に枯れむ

千草も今よりは

緑なからに

春にあわん

かも

と詠んでいるのである。

「牛痘発蒙」の刊年は嘉永三年末とみられているので、西村春雄はそれよりも前に立斎について牛痘種痘法を学び、またこのような形で牛痘種痘法奨励に一役買っていたことが察せられる。

春雄の牛痘奨励の版画（図四）が何時世に頒布されたかは明らかでないが、絵解き文の内容から「牛痘解蔽」の刊年嘉永五年前後と見てもよいのではなからうか。



図5 「牛痘發蒙」の扉

西村家は後記するように、始祖西村正円が江戸で本多侯の典医を勤め、後に侯に随行して播州山崎に至り、その後代々山崎藩医を勤めた家柄である。

春雄は、故郷播州にある時から牛痘種痘に関心を持っていたが、後年江戸に出て立齋について熱心に牛痘種痘法を学んだ。その著「牛痘解蔽」は牛痘種痘についての質問に応えたものであるが、その中で種痘に組む当時の医家を心掛けの点から分類し、鋭く批判しているのは異色である。絵解き文にもその片鱗が見られる。

種痘の普及に果してきた貢献、特に牛痘株を連綿として絶やさなかったことを絶讃しているが、彼は立齋の実験医学者としての研究態度をも学んだに相違ない。

左の一首は、幕命をうけてアイヌの痘瘡防遏のためはるばる蝦夷地に旅立つ師立齋に捧げられたものである。

あら蝦夷のたみくさあらず嶋かぜを

と、めむことは君が手ちから

春雄

西村家系

故
西村 正円

江戸にて本多侯典医
享保二十一年卒

故
西村 道円
(正円の養子)

山崎藩医
明和七年二月卒

故
西村 智順

山崎藩医
文政元年九月卒

故
西村 文礼

山崎藩医
安政五年三月卒
江戸亀有村
恵明寺に葬

故
西村 春雄

山崎藩医
文久二年十月卒
江戸住
行年五十九歳

故
西村 英藏
(春雄の養子)

山崎藩医
後に開業
嘉永元年生
大正十五年九月卒
行年七十九歳

故
西村 義男

開業医
第三高等学校
医学部卒業
明治七年生
昭和三十三年三月卒
行年八十五歳

西村 英男

開業医
阪大医学部卒
明治三十五年生
千葉市星久喜町
一一六二―三七在住

西村 明

千葉県がんセンター勤務
千葉大医学部卒
千葉市矢作町九九〇―二九在住

五、川田鴻齋の版画（図六）

図六は、静岡県小笠郡小笠町下平川の種痘医川田鴻齋が牛痘種痘法奨励のために作ったものである。（八）（九）
 版画の枠面、縦二四×横三五cm。左枠外に三行の文章が彫られている。



図六 川田鴻齋の版画

解説

抱瘡の神とハ誰か名付けん

悪魔外道の崇りなすもの

夫痘瘡ハ昔天平八丙子年ヨリ我日本ニ流行シ、夫ヨリ以来生ル、取ノ小兒
 十二三ハ死シ、又十二三ハ醜貌トナルカ故ニ、唐、阿蘭陀ニテ色々ノ術
 ヲ行フトイヘトモ遂ニ免ル、事無リシニ、我寛政年間阿蘭陀ニテ牛痘法ト云
 フモノ始リ、我日本エモ四五年以前ニワタリ、予師門ニ於テ庚戌春ヨリ施ス
 モノ一万五千余人トイヘトモ千ニ一ツモ損スル事ナシ。

然レトモ偽痘ト云テ痘瘡ニ似タルモノアリ。是ハ再ヒ種直スヘシ。此事ヲ
 知ラスシテ種ル医者モマ、之アリ、是ハ人ヲ惑ス事ニテ宣シカラス。ソノ事
 ヲ知リタキモノハ予師門ニ於テ著ス取ノ牛痘種法辨ト云フ書アリ、尋問ヘ
 シ。

親の苦もぬけて楽しむ嬰兒の

千代の命を結ぶ尊とさ

遠城東平川村

川田壽格門人^{*5}

誌之

嘉永六癸丑秋^{*6}

うえはうそう……………^{*7}

注解

* 1 この絵解き文では日本に痘瘡が初めて流行した年を天平八年としているが、天平七年（七三五）が通説。

* 2 川田家第四代鴻齋が小田原藩待医市川頭之の門に入って牛痘種痘法を習得し、嘉永三年春から小笠地方でこれを
実施したことを指す。

* 3 原文で「：知リタキモノヘテ師門ニ於テ」となっているのは彫師の彫り違いである。

* 4 「牛痘種痘辨」は、鴻齋が日本における痘瘡流行の始まり、人痘種痘法、牛痘種痘法について簡略に述べたもの。
この中で、偽牛痘には痘瘡を防ぐ力の無いことをも記している。

* 5 川田家では第三代、第六代共に寿格を名乗っているが、この場合は第三代寿格であり、鴻齋は自らを寿格の門人
としたのである。

* 6 鴻齋が嘉永三年から安政元年までの五年間に種痘した者は二万余人に達したという。(九)

* 7 三行全文を入れて刷ったものは入手できず、最初の二行についても全部解読できないでいるが、『うえはうさう日』に『月にひろまり』で始まるこの三行には、当時の種痘事情の一端が語られているように思われる。

六、山崎恭齋の版画(図七)



図 7 山崎恭齋の版画

図七は、図柄、絵解き文共に図六と殆んど同一で、牛痘児の種痘痕、その他に僅かな相違が見られるのみである。

版画の枠面、縦二四×横三五・五cm。

図六における絵解き文中の『予』は鴻齋のことで、寿格門人としての鴻齋が誌したものであるが、図七における『予』と山崎恭齋なる人物との関係はどうなるのであろう。将来の研究にまたねばならない。

七、三井元圃接痘所の版画(図八)

図八は、明治四十四年(一九一)ドレスデンに開催された国際衛生博覧会(一〇)で頒布された冊子 *Vaccination in Japan* の口絵である。この冊子は縦二二×横一四・八cm、三〇ページのものであるが、印刷、出版共にドレスデンで行われている。

原図の寸法不明。六色刷りの原図を、原色四色(赤、藍、黄、墨)で復元したものを撮影し、カラープリントしたものである。(凸版印刷株式会社調査)

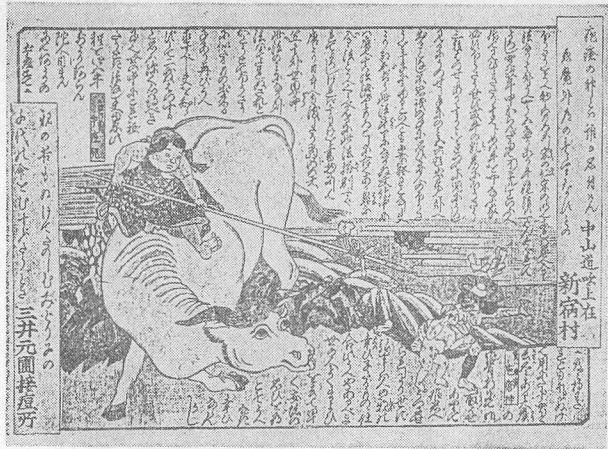


図 8 三井元圃接痘所から頒布された版画

解説

痘瘡の神とハ誰か名付けん

中山道吹上在

悪魔外道のた、りなすもの

新宿村

ほうさうをうへ初しハ、もろこし宋の仁宋の時也。これハ鼻へ入る、

法なり。其外うへやう五通りあり。

牛痘法ハ一ばんすぐれてよろし。寛政年中おらんだにて「イン子ル」といふ人、始て見ひらきたり。

其はじめハ牛をやしなふ家、必ずほうさうせず。或牛の乳房にほうさう三粒はつせしあり。其うミをとつて、小児にうつし見るに、うつせし手にのミ五六粒出来て、外へ出ることなし。不思議の事に思ひ、亦人のほうさうを、其子にうつるといへども、更に発ることなし。

夫より紅毛ぢう此法斗りになりぬ。文化中にハ、唐へ其法渡り、もろこしに古くある鼻に入る、法と、うへくらべ見るに、此法格別すぐれてよろしければ、其わけを書物にして、唐より日本へも渡したり。

当時は天竺其外世界中此法のミになり、外法へすたれぬ。されど、かとうとて、ほうさうに似たるもの出来る事あり。再びうへ直すべし。夫を知らずして二度はつすると思ふ深く心得べき事也。

世の中にこれ程たうとき法なし。夫ゆゑ此種を四五年前より阿らん陀人自まんにて、何よりの土産とて度々持わたれども、気が抜けて用にした、ず、やう／＼去冬、ある大疾の御ン骨折にて、御ン取よせありて、姫君へうつさせられしより、世に弘りしハ、人の親の幸ひ、子たるもの、仕合、此うへやあるべき。世の人よくまよひを去て、早く安堵の思ひを為こ

そ、うへなき幸ならんかし。

親の苦もぬけてたのしむみどり子の

千代の命をむすぶたうとさ

三井元圃接痘所

注解

本図では、立斎の図に比べ雲の形、絵解き文の配置などにも相違を見るが、疱瘡神が泣きじゃくる疱瘡の子供をまさに連れ去ろうとしている様子が新たに描き加えられて一層迫力を増しており、また絵解き文も、オランダで牛痘法が発明されたとしている点、オランダ人がわが国に痘苗を輸入しようと試みた年代を除いてはほぼ正確である。牛痘種痘奨励の版画の中でわが国を代表するものとして採用されたものであろう。

三井元圃なる人物については三井文庫に照会し、また中野操先生にも御教示を仰いだが無明に了り、従って本図の作製年代は不明である。

結び

筆者は、わが国における牛痘種痘法普及の端緒をなしたとまでいわれる牛痘種痘法奨励の版画七種について比較検討し、西村春雄の版画を除くすべての版画の絵解き文の中で牛痘種痘法がオランダでジェンナーが発見したと記されていることをはじめ知ったのである。

すでに天保十二年（一八四一）の冬に伊藤圭介は「啖咭喇国種痘奇法」を著して啖咭喇イギリスにおいて啖ジェンナーが牛痘種痘法を発見するに至った詳細を伝えており、嘉永二年（一八四九）までに出版された「牛痘小考」、「新訂牛痘奇法」、「牛痘新書」

などでも牛痘種痘法がイギリスで、あるいはイギリスでインネルが発見したと記述されている。

それにもかかわらず立齋およびその流れをくむ版画、中には立齋の版画の絵解き文中の史実の誤りを訂正した版画もあるにかかわらず、牛痘種痘法がオランダで発見されたことになっているのは何故であろうか。

嘉永二年三月に発布された蘭方禁止令が、蘭方医達の前途を大きくはばむものであったことはいうまでもない。ところが、発布後間なく、同年六月に、蘭方医達の長年渴望していた活性のある牛痘苗がオランダから長崎に到着したことは蘭方医達にとって大きな福音であった。これまでの危険な人痘種痘法に代って安全かつ有効な種痘法、すなわち、P・F・シーボルトをはじめ多くの蘭医により教えられてきた牛痘種痘法を実際に行うことよって国民の、特に幼児死亡原因として最も恐れられていた痘瘡を防遏することができ、また蘭方の優秀性も示すことができるからである。

ところが一般大衆にとり、オランダは鎖国時代にあっても通交のあった国であり名馴み多い国であるのに対し、イギリスははるかに遠い異国であった。大衆啓蒙をその目的とする絵解き文では、史実の正確さもさることながら牛痘種痘法を普及せしめるといふ大目的の上から、より効果的な選択が行われたとしても止むを得なかったのかもしれない。

謝辞

岸浩博士は、西村春雄の版画を筆者に知らせてくれたばかりでなく、その後もこれに関連して度々有益な情報を下さった。また、他の版画についても絵解き文の解説、その他で同博士に御援助を仰いだことは一再に止まらない。ここに、あらためて厚く御礼申し上げる。

さらに、つぎの諸先生、同学の諸兄から貴重な御教示、御助言を頂いたことに対し心から御礼申し上げる次第である。

中野 操 遠藤照子 立川昭二 大滝紀雄 西村英男 西村 明 桑田立親 加藤四郎 土屋重郎

青木允夫 山中太木 吉田 敦 (敬称略)

文献ならびに注

- (1) 「近代名医一夕話」 九四ページ 昭十二 日本医事新報社。
- (2) 伊東栄 「伊東玄朴伝」 大正五 玄文社。
- (3) 河内全節 医事叢話 中外医事新報 五七七号 四九九 明治三十七。
- (4) 石井研堂 「明治事物起原」 五六〇ページ 大正十五 春陽堂。
- (5) 桑田立親先生の教示による。
- (6) 岸浩 日本の白牛信仰に関する研究 日本獣医史学雑誌 八号 二五一—四一 一九七六。
- (7) 能美季一 「家畜疾病予防学」 六ページ 発行者 周防時雄 東京 昭和十四。能美季一は大正三年東京帝国大学農学部を卒業、後に農学博士の学位を受けた。
- (8) 立川昭二 「近世病草紙」 一二四—一三三ページ 一九七九 平凡社。
- (9) 土屋重郎 「静岡県の医史と医家伝」 三三—三三三ページ 昭和四十八 戸田書店。
- (10) ドレスデンの博覧会で日本側を代表し現地で活躍したのは宮島幹之助である。この冊子の内容は第一章 種痘の歴史、第二章 種痘法、それに附録として北里柴三郎が執筆した「日本における痘瘡と種痘」からなっている。北里は痘瘡常在地を戦野として戦った日本軍隊の痘瘡患者数、痘瘡死亡者数、致命率などを掲げているが、W・オスラーはその著者 *The Principles and Practice of Medicine* (1918) の中で牛痘種痘の有効な実例として北里の報告を紹介している。

Propaganda Bills for Vaccination Distributed
during the Kaei Period in Japan

Masao SOEKAWA

In March, 1849, the Tokugawa Shogunate proclaimed the "Order of Prohibition of Dutch Medicine" in order to suppress progressive medical doctors and to protect conservative doctors of

the Chinese school.

However, one boon to the progressive medical doctors, who had learned Dutch medicine and wanted to perform vaccination in place of variolation, was that a live vaccine virus strain was introduced in June of the same year to Japan through the courtesy of Dr. O. Mohnike, a Dutch physician stationed at Nagasaki.

Popularization of vaccination was, however, a very difficult problem, because variolation had long been performed in Japan.

Contrary to variolation, vaccination was criticized in various ways. Some conservative doctors blamed vaccination for injuring the skin of those vaccinated, while some others stated that vaccination requires those vaccinated to return their vaccine lymph, and so forth.

Among the people there were some who feared that a horn might grow out of their head or their voice might become like that of a cow when they were vaccinated.

Under such circumstances, progressive medical doctors had to search for and obtain non-vaccinated children to continue vaccination and to maintain the vaccine strain. Therefore, especially in midsummer and midwinter, the difficulty of their work was beyond description.

In this early period of vaccination a pediatrician named Ryusai KUWATA produced a creative wood block print so that common people could understand the superiority of vaccination over variolation. He distributed many of the prints widely.

Because Ryusai's picture was unique and attractive, and the explanatory notes were also easy

to understand, this wood block print acted as a good guide for common people in the understanding of vaccination.

Other doctors at that time, who were endeavoring to promote vaccination also made their own prints modeled after Ryusai's composition.

The author compared in detail the composition and the explanatory notes of seven different propaganda bills. Deciphering the explanatory notes of seven bills, he discovered that in six bills it was explained that vaccination had been discovered in the Netherlands by E. Jenner.

The author discusses why such an erroneous explanation appeared.